人文科教育研究　48　2021 年　pp. 291-298

シンポジウム

文学の授業における読解・鑑賞・創作をめぐって
―― 読解と創作をつなぐ読み書き教育の展望 ――

上　谷　順三郎

はじめに

第 69 回人文科教育学会（2021 年 2 月 28 日）のシンポジウム（「読むこと」と創作）に向け基調講演として，現在の文学の授業において「読むこと」における読解が創作とどのような関係にあるのかを以下の 2 つの側面から考えたい。

1．検討課題

一つは，文学の読解が，文学の良さ・面白さを引き出しているのか，別な言い方をすると，教室で文学を読む意義が子どもに感じられているか，という視点で現状を考えるべきだろう。検討課題として考えられるのは以下の 2 点である。

（1）文学の特性（良さ・面白さ）を生かした読解授業とはどのような授業か。

（2）文学の特性をどのように捉えたらよいか。

二つは，美術や音楽，保健体育のダンスなどの授業では「鑑賞」「表現（創作）」が行われているが，文学の授業において，そういった「鑑賞」「創作」はどのように行われているのか，という視点で現状を考えたい。検討課題として考えられるのは以下の 3 点である。

（1）いわゆる作品の（理解・）鑑賞はどのように行われているか。

（2）そこでの（理解・）鑑賞は創作に資するものになっているか。

（創作のための文学読解・鑑賞は行われているか。）

（3）どのような読解・鑑賞が創作に資することができるか。

上の課題に対して以下の提案を行いたい。

2．提案―語りの構造を生かした音読活動に向けて―

その作品を朗読するための（語りの音声化のための）構造を把握する読み方教育を行うこと。

それは，学習者が朗読者としてその作品をどのような作品と捉えて音声化するのか，というイメージを持って音読することであり，例えば，以下のような形で作品をとらえることができることを意味するものである。

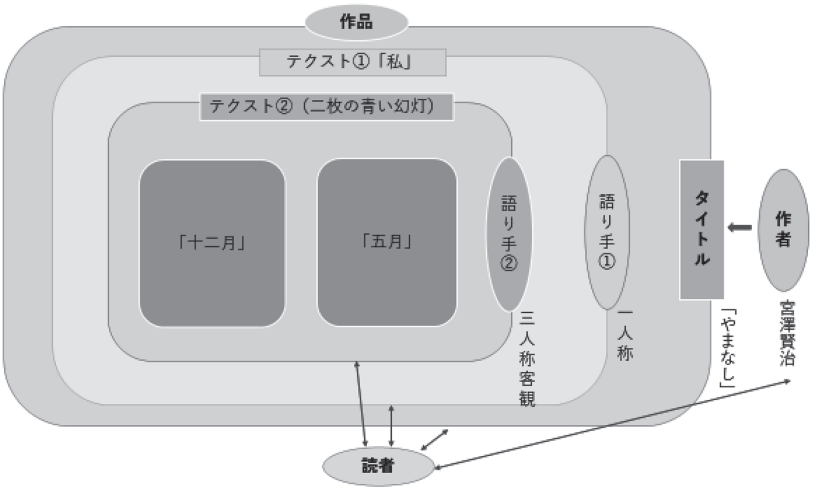
（1）いわゆる額縁構造の作品の場合

「ごんぎつね」:「わたし」が茂平じいさんから聞いた「ごん」と「兵十」の物語。

「大造じいさんとガン」:「わたし」が大造じいさんから聞いた話をもとに書いた「大造じいさん」と「ガン（残雪）」の物語。

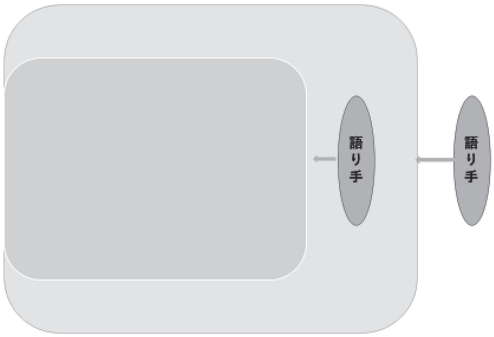
「やまなし」:「私」が「私」の幻灯（「五月」「十二月」）を語る物語。

例えば，「やまなし」を図にすると次のようになる。



「少年の日の思い出」:「私」が客である「僕」の少年の日の思い出話を聞く物語。

例えば，「ごんぎつね」「大造じいさんとガン」「少年の日の思い出」は次のような構造として捉えることができるだろう。



（2）その他，中学校国語教科書文学教材の場合

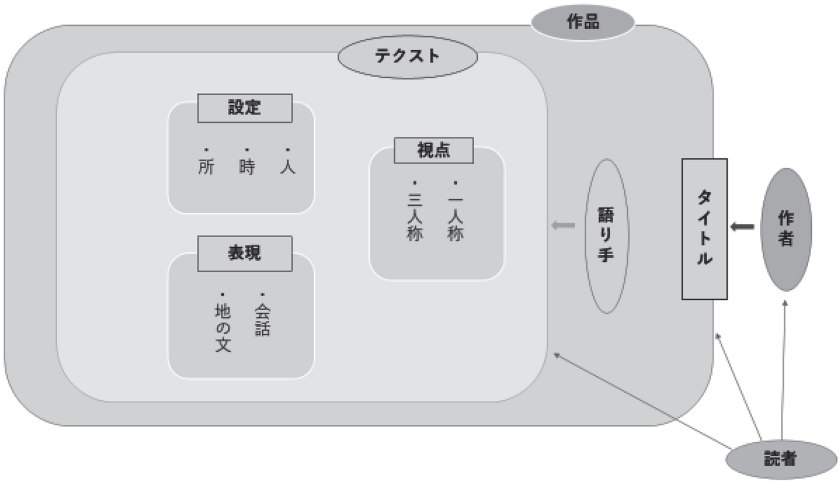
「走れメロス」:「メロス」が王との約束の３日間で妹の結婚式をすませて人質の友人のところに戻る物語。

「故郷」:「私」が 20 年ぶりに故郷へ戻り別れを告げる物語。

「握手」:「わたし」が児童養護施設にいた時のルロイ修道士と再会した物語。

（3）「文学」教材化の４つの方法

語りの構造を際立たせるために，教材化においては「タイトル」「視点」「設定」「表現」に着目させたい。次の図は，授業のイメージを共有するためのものである。



①「タイトル」への重奏的アプローチ

a　作者のメッセージ・創作意図を考える

b　テクスト内容を具体化する「副題」を考える

c　読者自身の読みに合う「別のタイトル」を考える

②「視点」に基づく構造化とその音読

一人称：「他の人物の会話文」以外の全部を一人で読む

三人称（限定）：「中心人物の会話文」「他の人物の会話文」「地の文」を別の人が読む

三人称（全知）：「地の文」をぞれぞれの人物に寄り添って読む

三人称（客観）：「地の文」をそれぞれの人物から離れて読む

③登場人物に焦点を当てた複数の「物語文」づくり―「設定（人・時・所）」の共有―

「物語文」(石原千秋）によって，以下の２つの物語文を作る。

〇〇が～する物語

〇〇が～になる物語

登場人物の言動や変化を物語として取り出すことになるが，これによって，時間軸を中心として作品世界をどう分けるか，因果関係によって断片をどう組み合わせるか，などを考えることになる。

④読者それぞれの理由で選ぶ「私の一文」―「表現」への接近―

①～③が全体を指向するのに対して，これは部分に向かう活動で，会話や地の文の内容や言葉の感覚，情景の描写や事態の説明などに読者の意識を向けるために行う。

（４）読書行為の図による学習指導のイメージ化

ここまでの読書行為の図をもとにした教材化によって目指すのは次のことである。

・読むことの可能性を知ってもらうこと

・こういった読み方を学習者と共有すること
・そのもとで個人やグループ，学級での学習課題を設定すること
・こうした文学を読む授業によって創作の授業への展開を図りやすくすること

具体的には，作者・作品・読者の関係において読み，学び，作品の特性に応じて，読者と作者・作品・テクストとの関わりのどの局面に焦点を当てるかを考え，授業者と学習者が共同で学習指導計画を立てていくことを目指している。

さらに，次のような学習・話合いのテーマを想定することができるだろう。
・作者はどうしてこういう物語を作ったのか
・こういう作りの物語を読んで読者である自分たちはどんなことを考えたか

（5）学習指導と評価

創作と関連づけた読解指導により，読解においても創作においても評価の観点が設定できる。
①文学作品の語りの型の学習指導
②語られるテクストの構造（タイトル・視点・設定・表現）の効果についての学習指導
③書き換えを含む創作作品の鑑賞とその構造的強度の評価についての学習指導

（6）展望

子どもたちは，語りの型とその組み合わせによって，様々な物語が語られ，作品化されていることを知る。子どもたちは，そのことを知り（読解し），味わう（鑑賞する）ことで，自らの創作にその体験と知識を生かすことができる。

こうした読解・鑑賞・創作の体験や知識が，「読むこと」と創作の関係を改善し，文学の授業を充実させ，日常における現代作品の読書へとつながっていくことを期待している。

また，こういった学びは，言葉による見方・考え方を働かせることであり，文学や「国語」を超えて，主体的・対話的で深い学びにつながっていくだろうと考えている。

3．参考文献（発行順）

・松本修，文学の読みと交流のナラトロジー，東洋館出版社，2006.7.20
・寺井正憲編著，船橋国語教育の会著，小学校国語科授業アシスト　学習プロセスがよくわかる！　深い学びを実現する書き換え学習の授業づくり　やさしくできて効果的な言語活動，明治図書出版，2016.12
・浜本純逸監修，武藤清吾編，ことばの授業づくりハンドブック　中学校・高等学校　文学創作の学習指導―実践史をふまえて―，渓水社，2018.12.13
・松本修・桃原千英子編著，中学校・高等学校国語科　その問いは，文学の授業をデザインする，明治図書出版，2020.7

（鹿児島大学）